

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：24102

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K19709

研究課題名（和文）介護を機に離職を選択する息子介護者の健康問題が生じるプロセス

研究課題名（英文）Processes that cause health problems of son caregivers leaving their jobs

研究代表者

山本 翔太（Yamamoto, Shota）

三重県立看護大学・看護学部・助教

研究者番号：00823965

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：男性介護者は、性別に付随させた社会的役割である性役割の規範と、男性介護者が担う介護役割の間で葛藤を抱えていることが示唆された。また、介護離職を選択した男性介護者は、介護が仕事になるという認識のもと、介護を継続するに至り、介護が人生の目標となる可能性が示唆された。介護期間中は人生の目標となった介護を糧に、介護生活を送ることができる。しかし、介護終了後は人生の目標を喪失する経験につながる危険性があることが考えられる。以上のことから、男性介護者は性役割の影響を受けながら、自身の介護役割についての自己認識を統合していることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義として、男性介護者の課題の認識に基づき、介護離職が男性介護者の自己認識のあり方に対して、性役割意識が影響を及ぼしていることが示唆された。また、介護離職が男性介護者の自己認識のあり方に対する性役割の影響から、男性介護者個人を支援するだけでなく、男性介護者を取り巻く社会の規範を前提に支援する必要性が示唆された。このことから、本研究の社会的意義として、研究成果は男性介護者支援の一助になると考える。

研究成果の概要（英文）：It was suggested that male caregivers have a conflict between the norm of sexual role, which is a social role associated with gender, and the care role played by male caregivers. In addition, it was suggested that male caregivers who chose to leave their jobs will continue to take care of them, recognizing that care will become a job, and that care may become a goal in their lives. During the care period, you can live a care life based on the care that was the goal of your life. However, after the end of care, there is a risk of losing the goal of life. From the above, it is suggested that male caregivers integrate their self-awareness of their own care role while being influenced by their sexual role.

研究分野：在宅看護

キーワード：介護離職 男性介護者 自己認識 性役割 介護役割

1. 研究開始当初の背景

近年、高齢化に伴う要介護高齢者の増加や核家族化、性別役割意識の変化から、介護者全体に占める男性の割合は、2001年に23.6%（厚生労働省,2001）、2019年には35%（厚生労働省,2019）と、増加の一途をたどっている。つまり現在においては、主たる介護者の3人に1人は男性であり、介護を担う男性は珍しい存在ではないと考えられる。また、男性介護者の年齢階級別構成割合は、40歳未満が2.5%、40歳から49歳が6.2%、50歳から59歳が18.8%、60歳から69歳が28.5%であることから、40歳から69歳の男性介護者が56%を占めている（厚生労働省,2019）。男性介護者の実態について研究する彦ら（2016）は、男性介護者の特徴として、「サービス導入を躊躇し、一人で抱え込む状況に陥りやすい」ことを報告している。このことから男性介護者は、介護に対し孤独な姿勢であることが窺える。また、男性介護者への支援について研究する荒井（2012）は、研究の中で「介護にのめり込みすぎて自身の生活がままならなくなる」ことを説明し、男性介護者の介護における生活上の問題を明らかにしている。さらに、男性介護者の特徴について研究する斎藤（2009）は、炊事、裁縫、掃除などの「家事スキルの有無は、男性介護者が抱える困難や負担の最初の分岐点となっている」ことを指摘している。したがって、男性介護者は家事や介護などを新たな役割として期待されながらも、家事に困難を抱きながら介護と向き合っていることが推測できる。

そして、高齢者虐待問題において、被虐待高齢者からみた虐待者の続柄は、息子が39.9%、夫が21.6%と、虐待者の約6割を男性介護者が占めている現状がある（厚生労働省,2018）。その背景には、社会的孤立、経済的問題および介護負担や男性介護者自身の健康問題が指摘されている（Okoshi.F et al.,2016）。この背景の要因である社会的孤立や経済的問題について、介護と就業・退職決定の関連を研究した樋口ら（2006）は、介護という状況が「正規雇用や自営業の就業・退職の決定に影響を及ぼしている」ことを明らかにし、男性が担う介護は離職の意思決定に影響していると言える。さらに、厚生労働省（2013）や就労者の家族介護役割について研究した美ノ谷ら（2005）の報告によると、男性介護者は介護と就業の両立に困難をきたしていると報告されており、仕事継続と介護の両立が大きな課題となっていることが理解できる。

このような男性介護者の仕事継続と介護の両立の課題については、次のように様々な研究や指摘がなされている。男性介護者の介護継続要因について研究する長澤ら（2008）は、介護継続を阻害する要因について、「自分の体調の悪化に伴う継続困難や不安、被介護者の病状の悪化、先の見えない不安等を持つ介護者」が多いことを述べている。さらに長澤ら（2008）は、今後、就業しながら介護を行う男性介護者の増加を示唆している。また、介護破産の実態について述べている空野（2017）は、介護離職は貧困への入り口であり、介護破産という経済的な困窮を避けるために現実的な資金計画を立てる重要性を指摘している。さらに、空野（2017）は、男性介護者が介護終了後に元の仕事に復職できる可能性は低く、男性介護者の人生設計が狂うことも指摘している。このことから、介護に伴う男性介護者の先の見えない不安の一つとされる経済的困難や人生設計の変化についても、仕事継続と介護の両立が困難なことにより引き起こされる男性介護者の課題でもあると言える。

そして、女性介護者の就業継続について研究する西向ら（2002）は、「介護者の精神的なゆとりや気分転換の不足、および睡眠や休息の不足」が就労継続に支障をきたす大きな阻害要因として指摘している。また女性介護者の就業継続について研究する植田ら（2001）も同様に、就労継続が困難な方向に影響する要因として、「就労女性が介護と仕事の両立から病気になること等」が挙げられると述べている。このように女性介護者に焦点を当てた就労継続を困難にする要因には身体的、精神的要因が注目されているが、男性介護者に焦点を当てた就労継続について述べられている研究は少ない。

これらの男性介護者の課題を解決に導く重要な指摘の一つとして、性役割の概念に触れながら、平山（2017）は次のように述べている。「男性介護者は、『介護は男らしさに反すること』として社会的行動である介護を実践している事実として公的に説明することが難しい場合がある」（平山,2017）と述べており、男性介護者が介護を行っていることを公表できない理由として、男性という性役割に基づいた物事の考えが影響していると言える。ここで述べる性役割には、男性役割と女性役割があり、男性役割は仕事をし収入を得て家族を養う稼得役割に代表され、女性役割は婚家の親の世話をするという嫁役割に代表される（平山,2017）。また、平山（2017）は、女性介護者の中でもとりわけ嫁介護者について述べる中で、「嫁ぎ先の義父母の介護や自身の子どもの世話など嫁役割を担うことがある」と指摘している。このように、男性介護者と女性介護者の両者の場合においても、介護は女性が担うものという社会規範の中で生活上の役割を果たさなければならないという日本の性別役割分業やジェンダー規範が影響を及ぼしている現状がある。このような現状において、男性には稼得役割が求められる中で、介護役割を選択する男性介護者が存在し、女性には嫁役割としての介護役割が求められる中で介護役割を選択する女性介護者が存在する。そのため、性別の違いにより社会において期待される介護役割の位置付けが異なることが言える。したがって、男性介護者は既存の性役割に対して女性介護者とは異なる関係を持っており、それゆえに女性介護者とはまた異なった経験や困難を抱えていることが推測できる。

以上のことから、男性介護者の課題と社会規範に基づいた既存の性役割には重要な関係があることが推測できる。先述したように、介護者の就労継続や介護継続の要因に関する研究はみられる（春名ら,2018；林,2015；片山ら,2015；西向ら,2002；植田ら,2002）が、介護離職と性役割との関連が十分に説明されている研究は少ない。また虐待については、性別と結びついて説明されているものの、介護離職、経済的困難、人生設計と同様に、性役割との関連が十分に説明されている研究は少なく、介護離職をした男性介護者に関し、その介護役割をめぐる自己認識に対して性役割がどのような影響を与えているのかは明らかではない。

以上のような男性介護者の課題の認識に基づき、本研究は介護離職が男性介護者の自己認識のあり方に対して、どのような影響を及ぼしているのかを、特に男性の持つ性役割意識との関わりにおいて明らかにしたいと考える。

2. 研究の目的

本研究は、介護離職が男性介護者の自己認識のあり方に対して、どのような影響を及ぼしているのかを、特に男性の持つ性役割意識との関わりにおいて明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン

本研究では、分析方法に木下（2018）が示す修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach:以下、M-GTA）を用いた質的帰納的研究デザインとした。この分析方法は、人間の社会的相互作用にある男性としての意味付けをどのように選択し、判断するかという男性の意識的理解に関わる研究に適している。また研究対象とする現象がプロセス的性格を持っている研究に適している。したがって、この分析方法は、男性介護者の性役割意識を背景に、介護離職が男性介護者の自己認識のあり方に対してどのような影響を及ぼしているのかを分析していく本研究に適していると考えた。

(2) 研究対象者

研究対象者は要介護認定を受けた高齢者を介護し、介護離職を経験した男性介護者とした。対象要件は以下の通りである。男性介護者については、①主介護者が男性介護者である者とする。②介護離職を経験した男性介護者とする。③精神疾患を患っている男性介護者は除外する。④介護年数については、介護開始より3ヵ月頃に慣れが生じてくる（樋口ら,2004）ことから、介護開始より3ヵ月以降を対象の介護年数とする。被介護者については、①被介護者は性別を問わず、要介護認定を受けた40歳以上の者とする。②被介護者の疾病や認知症の有無は問わない。

研究対象者の募集手順については、研究対象者の多様な属性や特徴を収集する必要があるため、便宜的サンプリングを用いた。本研究の目的と内容に基づき、あらかじめ理論的飽和に至るであろうと考えられる人数を設定し、対象者は分析を行いながらその都度選定した。

研究依頼方法については、研究者が関わっている家族の会に参加している男性介護者本人に調査の目的、内容と方法について書面と口頭で説明し、対象要件を満たす男性介護者の協力を得た。また家族の会の代表者や訪問看護ステーションの管理者に調査の目的、内容と方法について書面と口頭で依頼し、対象要件を満たす男性介護者の紹介を得た。その際、管理者からは対象者に対して電話等にて本研究の主旨を伝え、研究協力の許諾の可能性がある場合には、住所等の連絡先を研究者に教えてもよいかどうかの同意を得た。

(3) データ収集方法

データ収集期間は2019年8月～12月であった。同意が得られた対象者に、プライバシーが保たれる対象者の自宅の一室でインタビュー調査を行った。またインタビューデータの豊富な内容を確保するために、インタビューガイドを用いた半構造化面接を行った。

基礎情報は、①男性介護者の年齢、雇用形態、婚姻の有無、健康状態、介護年数、被介護者との続柄、②被介護者の年齢、介護度とした。上記の基礎情報は、介護者および被介護者の属性や特徴を把握するために用いた。

インタビュー内容は、男性介護者が介護を始めたきっかけ、離職した時期と離職の理由、介護を自分の生活の中に位置づけた経過、離職前後の結婚観や老後の暮らし、介護者自身の健康に対する認識やその考え、離職後の介護生活において困難に感じた状況とした。インタビュー内容の順序は、男性介護者が現在に至った経緯を想起しやすいように、離職前から離職後とした。

(4) データ分析方法

分析は離職前後の変化を重点的に、木下（2018）の示すM-GTAの手順に沿い進めた。録音したテープデータを基に逐語録を作成した。分析テーマは「介護離職を経験した男性介護者が持つ自己認識のあり方」、分析焦点者は「介護離職を選択した男性介護者」とした。データの収集と分析を交互に行うため、男性介護者から収集した最初の数例のデータを分析し、その結果を踏まえて次のデータ収集を行った。具体的な分析方法は、まずデータから関連する箇所を抜き出したものを具体例とした。次に具体例から概念を生成し、概念の完成度を上げるために類似例、対極例を検討した。生成した概念間の関係からカテゴリーを生成し、概念やカテゴリー相互の関係性を示

するために結果図、ストーリーラインを作成した。分析の過程では、M-GTA に精通した研究者や在宅看護の専門家とともに内容妥当性を確保するための検討を行った。

(5) 倫理的配慮

研究の趣旨、方法、研究への参加は自由意思であること、予期される利益や不利益、個人情報保護、研究成果の公表では、匿名性を担保することを書面と口頭で説明した。またインタビューに参加した後でも参加を撤回できるように書面も準備し、内容の説明とともに本人に渡した。本研究は、三重県立看護大学研究倫理審査会の承認を受けて実施した（通知番号 190403）。

4. 研究成果

(1) 研究対象者の概要

研究対象者の概要は表 1 に示す。研究対象者は 52 歳から 66 歳の男性介護者 5 名であった。平均年齢は 58.6±5.72 歳、離職時の平均年齢は 52.4±3.78 歳、平均介護年数は 5.2±3.70 年であった。インタビュー時間は 41 分から 1 時間 49 分であり、平均 1 時間 7 分であった。

表1 研究対象者の概要

対象者数	5名
年齢	52～66歳
離職時の年齢	50～59歳
雇用形態	正規雇用（3名）、非正規雇用（1名）、自営業（1名）
婚姻の有無	有（3名）、無（2名）
被介護者との関係	両親（2名）、母親（3名）
被介護者の介護度	要介護5（5名）、要介護4（1名）、要介護2（1名）
介護期間	1年1ヵ月～10年

(2) 介護離職を経験した男性介護者が持つ自己認識のあり方

得られたデータを分析した結果、3 のカテゴリーと 12 の概念が生成された。生成された概念とカテゴリーをもとに結果については図 1 に示した。【 】内はカテゴリー、〈 〉内は概念を示す。以下、それぞれについて簡単に説明する。

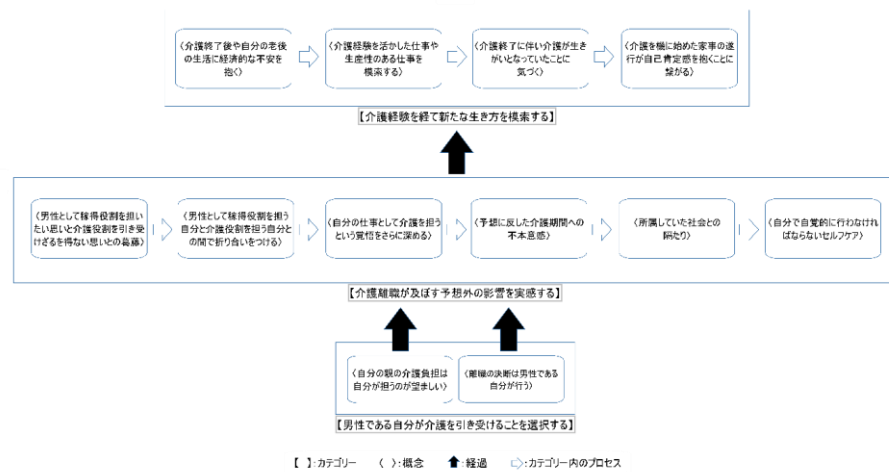


図1 介護離職を経験した男性介護者が持つ自己認識のあり方に対する性役割の影響

(3) 各カテゴリーの構成

【男性である自分が介護を引き受けることを選択する】は、〈自分の親の介護負担は自分が担うのが望ましい〉、〈離職の決断は男性である自分が行う〉の 2 つの概念から構成されている。【介護離職が及ぼす予想外の影響を実感する】は、〈男性として稼得役割を担いたい思いと介護役割を引き受けざるを得ない思いとの葛藤〉、〈男性として稼得役割を担う自分と介護役割を担う自分との間で折り合いをつける〉、〈自分の仕事として介護を担うという覚悟をさらに深める〉、〈予想に反した介護期間への不本意感〉、〈所属していた社会との隔たり〉、〈自分で自覚的に行わなければならないセルフケア〉の 6 つの概念から構成されている。【介護経験を経て新たな生き方を模索する】は、〈介護終了後や自分の老後の生活に経済的な不安を抱く〉、〈介護経験を活かした活動や生産性のある仕事を模索する〉、〈介護終了に伴い介護が生きがいとなっていたことに気づく〉、〈介護を機に始めた家事の遂行が自己肯定感を抱くことに繋がる〉の 4 つの概念から構成されている。

(4) ストーリーライン

男性介護者が介護を引き受ける段階において、男性介護者は【男性である自分が介護を引き受けることを選択する】ことを自らが意図した選択として捉える。この選択により、介護離職をした男性介護者は、介護を新たな仕事として置き換えたうえで介護生活を送る。しかし、介護生活を送っていく中で、既存の性役割とは異なる役割を引き受ける葛藤や不本意感等を抱き、【介護離職が及ぼす予想外の影響を実感する】こととなる。そして、男性介護者は介護離職による予想外の影響を受けながらも、介護終了後の段階においては、介護経験を活かした活動や生産性のある仕事を模索することで既存の性役割に戻る生き方や、自身の介護役割を肯定した価値観を持つことで、既存の性役割に戻らない生き方を模索する。これを男性介護者は【介護経験を経て新たな生き方を模索する】こととして捉え、性役割の影響を受けながら自身の介護役割についての自己認識を統合していた。

(5) 考察および結論

介護離職が男性介護者の自己認識のあり方に対して、どのような影響を及ぼしているのかを、特に男性の持つ性役割意識との関わりにおいて明らかにするために、5名の男性介護者に半構造化面接法を用いてM-GTAにて分析を実施した。

その結果、男性介護者の介護離職の選択には家族内の状況が影響を及ぼすこと、介護離職による影響には、既存の性役割の規範が基盤にある男性介護者の葛藤を引き起こすこと、介護者の立場ではセルフケアの優先順位が低くなること、介護が人生の目標となる可能性があることが示唆された。特に男性介護者の性役割意識においては、稼得役割といった性役割の規範と自己認識（セルフ・アイデンティティ）の間で葛藤を経て、介護と稼得役割のどちらかで自己実現を目指していることが明らかとなった。介護離職が男性介護者の自己認識のあり方に対する性役割の影響から、男性介護者個人を支援するだけでなく、男性介護者を取り巻く社会の規範を前提に支援する必要性が示唆された。

<引用文献>

- ① 荒井康之 (2011) : 2010 年度 勇美記念財団研究助成 完了報告書 男性介護者への支援に関する研究 男性介護者が抱える問題・課題の調査とその支援策の実施および検証、施策の提言, 勇美記念財団, Retrieved from http://zaitakuiryo-yuumizaidan.com/data/file/data1_20120605102437.pdf. (access 2020-9-16)
- ② 春名誠美, 福原隆子 (2018) : 仕事と介護の両立を継続してきた介護者の体験, 日本在宅看護学会誌, 6(2), 56-64
- ③ 林一美 (2015) : 在宅で認知症配偶者介護を行う後期高齢男性の介護継続の特徴, 日本看護学会論文集 在宅看護, 45, 39-42
- ④ 樋口キエ子, 田城孝雄 (2004) : 医療的ケアをになう家族介護者支援に関する研究 医療的ケアに慣れる過程で体験するたいへんなことから, 日本在宅ケア学会誌, 8(1-2), 50-57
- ⑤ 樋口美雄, 黒澤昌子, 酒井正他. (2006) : 介護が高齢者の就業・退職決定に及ぼす影響, 経済産業研究所, 6, Retrieved from <https://www.rieti.go.jp/jp/publications/dp/06j036.pdf>. (access 2019-4-25)
- ⑥ 平山亮 (2017) : 介護する息子たち 男性性の死角とケアのジェンダー分析 (第1版), 勁草書房, 東京
- ⑦ 井上輝子, 上野千鶴子, 江原由美子他. (2002) : 岩波 女性学事典, 岩波書店, 東京
- ⑧ 片山圭子, 藤川あや, 諸橋理恵子 (2015) : 医療ニーズのある利用者を介護する主介護者の介護負担および在宅介護継続の要因に関する研究, 日本看護学会論文集 在宅看護, 45, 3-6
- ⑨ 木下康仁 (2018) : ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて (1), 弘文堂, 東京
- ⑩ 厚生労働省 (2001) : 平成 13 年国民生活基礎調査の概況 III 介護の状況 3 主な介護者の状況, 厚生労働省, Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa01/3-3.html>. (access 2020-9-14)
- ⑪ 厚生労働省 (2013) : 平成 24 年度仕事と介護の両立に関する実態把握のための調査研究事業報告書, 厚生労働省, Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/dl/h24_itakuchousa00.pdf. (access 2019-2-12)
- ⑫ 厚生労働省 (2018) : 平成 30 年度「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」に基づく対応状況等に関する調査結果, 厚生労働省, Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/content/12304250/000584234.pdf>. (access 2020-8-2)
- ⑬ 厚生労働省 (2019) : 令和元年国民生活基礎調査の概況 IV 介護の状況, 厚生労働省, Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/05.pdf>. (access 2020-8-2)
- ⑭ 美ノ谷新子, 松下裕子, 福嶋龍子他. (2005) : 就労者の家族介護役割一病院勤務者の家族介護参加実態調査の分析から一, 日本看護学会誌, 14(2), 118-129
- ⑮ 李野暉尚 (2017) : 人生を破滅に導く「介護破産」(第1版), 幻冬舎, 東京
- ⑯ 長澤久美子, 飯田澄美子 (2008) : 男性介護者の介護継続要因, 家族看護学研究, 14(1), 58-67
- ⑰ 西向咲子, 濱下智巳, 北窓千夏他. (2002) : 女性介護者の就労継続を阻害する要因と利用者要因, 神戸大学医学部保健学科紀要, 18, 27-41
- ⑱ Okoshi.F, Tsukasaki.K, Omote.S (2016) : Responding to cases of elder abuse requiring protection and separation: skills for specialists, Journal of the Tsuruma Health Science Society Kanazawa University, 39(2), 1-12
- ⑲ 斎藤真緒 (2009) : 男が介護すること—家族・ケア・ジェンダーのインターフェイサー, 立命館産業社会論, 45, 71-88
- ⑳ 新村出 (2008) : 広辞苑 (6), 岩波書店, 東京
- ㉑ 植田恵子, 岡本玲子, 中山貴美子 (2001) : 女性介護者の就労継続に影響すると考えられる要因, 日本在宅ケア学会誌, 5(1), 67-75

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山本翔太, 清水真由美, 中北裕子
2. 発表標題 介護離職を経験した男性介護者の自己認識－性役割による影響を中心として－
3. 学会等名 第26回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------